

渡辺の津跡(天満八軒家船着場の跡) 大阪市中央区天満橋京町2-9

- ▶ 現在、土佐堀川に架かっている渡辺橋は、「渡辺の津」が名前の由来で、現在の天満・天神橋付近は、平安中期以降「渡辺の津」と呼ばれていました。承和11年(844)、「難波鴻臚館を摂津国府の政庁に転用した」との記録が残っており、鴻臚館は渡辺の津にあったということから、摂津国府は渡辺の津にあったと思われます。渡辺の津は、熊野参詣の出発点としての位置を占め、道中に熊野権現の分霊を祀ったいわゆる九十九王子社の第一王子社が設けられた場所です。江戸時代になり、この船着場を「八軒家浜」と呼ぶようになりました。三十石船や淀川の荷客輸送にあたった過書舟の発着場として大変賑わいました。



寿永4年(1185)2月18日、平家軍追討の命を受けた源 義経は、渡辺の津から20隻の船で漕ぎ出し、紀淡海峡を南下、折からの暴風雨に乗じて、通常2日かかる行程をわずか6時間で阿波の国勝浦(現在の小松島市)に辿り着きました。渡辺の津を出立する前、参謀の梶原景時と「舟に逆櫓をつけるかつけないか」で論争になったことは有名ですし、前号でも「朝日神明社」でご紹介しました。また、連載12回目で「逆櫓之松跡」でもご紹介していますのでご参照ください。

渡 辺 邸

大阪市淀川区西三国3

- ▶ No.7でご紹介しました「渡辺の津」を支配していた豪族 渡辺氏は源 義経の出陣に尽力したといわれます。その渡辺氏の邸が今でも残っており、子孫の方がその邸で生活されています。



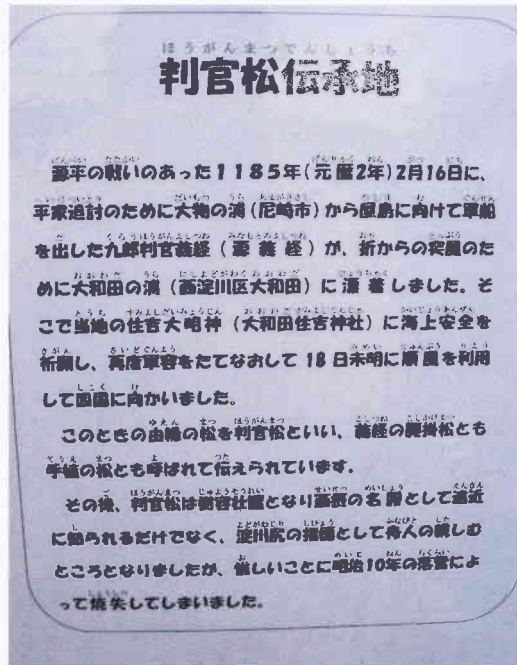
説明板があるものの読み取ることができない



判官松伝承地

大阪市西淀川区大野2-4（大野下水処理場北1号門前）

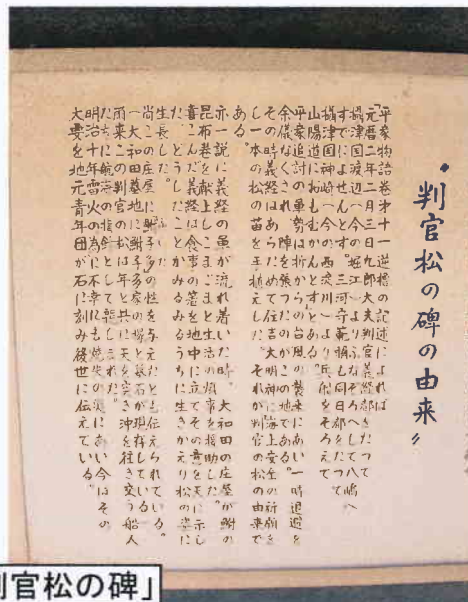
- ▶ 元暦2年(1185)2月16日、大物の浦(現在の尼崎市)から平氏追討の激戦地・屋島に向けて暴風の中を出帆した九郎判官こと源義経は、大波にさらわれ、この付近の大和田の浦に漂着しました。義経が渡航と戦勝を祈願するため、住吉大明神(大和田住吉神社)に立ち寄った際、小さい丘と老松があったところで休息をしたと伝えられています。その後、義経は無事に航海に成功し、屋島において平氏に戦勝します。現在、大野下水処理場の北正面の門前に伝承地として碑が立っていますが、以前はさらに南方(海側)に立っていたそうです。明治10年(1877)、老松は落雷により焼失しました。



判官松之跡(大和田住吉神社)

大阪市西淀川区大和田5-20-20

- ▶ 義経が必勝祈願したという大和田住吉神社の境内には、「判官松」を顕彰するため、昭和16年(1941)、「判官松之跡」の碑が大和田青年団によって建てられました。



神社境内にある「判官松の碑」

谷三兄弟の墓(本傳寺)

大阪市北区兔我野町14

- ▶ 備中松山藩出身の谷三兄弟(長男 三十郎、次男 万太郎、三男 周平)は、いずれも新選組に加わった隊士でした。その三兄弟の墓が本傳寺にあります。

安政3年(1856)、谷 三十郎による(万太郎の説もあり)何らかの失策により、お家断絶の命を受け、備中松山藩の士籍を失い、大坂に移ります。三兄弟については次のとおりです。

谷 三十郎 生年不詳～慶応2年(1866)4月1日
文久3年(1863)ごろ新選組に入隊したといわれ、池田屋事件に弟 万太郎と共に参戦し、17両の褒章金をもらっています。
その後、隊の中で重要ポストに就任し、副長助勤、七番隊組長を歴任しています。
慶応2年(1866)4月1日、三十郎の死体が京都東山の祇園社(現在の八坂神社)石段下で発見されました。死因は「頓死」とだけあり、暗殺説、病死説の二つの説があり明らかではありません。

谷 万太郎 天保6年(1835)～明治19年(1886)6月30日
万太郎は、大坂の医師 岩田文硯の食客となり、その後、南堀江2丁目にある酒屋「サカナツ」の納屋を借りて剣術・槍術の道場を開きました。
新選組への入隊は文久3年(1863)秋以降と考えられます。池田屋事件には兄と共に参戦し、17両の褒章金をもらっています。その後も道場を経営しており、正確には正式な隊士でなかったのかもしれない、大坂の分隊長として隊士を勧誘していたと考えられます。
兄の三十郎が死亡した後、新選組とは縁を切り、大坂の釣鐘町で道場を開きました。道場の運営はうまくいかなかったようです。

谷 周平(昌武) 嘉永元年(1848)5月20日～明治34年(1901)12月2日
二人の兄と同様、新選組への入隊は文久3年(1863)秋以降と考えられます。
池田屋事件の直前、元治元年(1864)に新選組局長 近藤 勇の養子となっています。
兄 三十郎の死後、養子縁組を解消して谷姓に復姓します。その後、新選組では監察職を務めました。
鳥羽伏見の戦い後、大坂城へ撤退した新選組は海路江戸へ戻りますが、周平はその際に隊を脱走し、以後の消息は一時不明となります。
明治になり、出身地の備中松山に戻るも明治5年(1872)頃には再度故郷を後にしています。
播田ツルという年上の女性と結婚しましたが、明治20年(1887)に離婚しています。
山陽鉄道神戸事務所の職員として働き、神戸市にて53歳で病死しました。



谷家の墓



墓碑の左側面に三十郎と昌武が確認でき、右側面に万太郎の法名が記載されている。

谷 三十郎、万太郎が大坂の地で、関わった事件の史跡を紹介します。

ぜんざい屋事件 (土佐藩士 大利鼎吉遭難の地)跡

大阪府中央区瓦屋町1-40

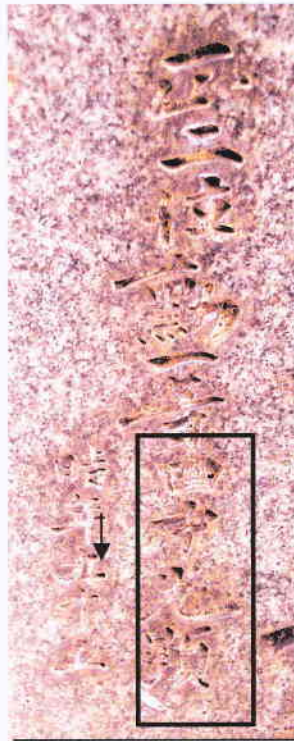
- ▶ 元治2年(1865)正月。土佐勤王党の大利鼎吉、浜田辰弥(のちの田中光顕)、橋本鉄猪(のちの大橋慎三)らが大阪市中を焼き払い、大坂城を乗っ取るという計画を立てていました。土佐勤王党員である本多大内蔵は、この場所に石蔵政右衛門という名でぜんざい屋を営んでいました。しかし、大坂駐在の新選組に情報が漏れ、1月8日、谷 三十郎、万太郎兄弟、正木直太郎、高野十郎の4人で、このぜんざい屋に踏み込みました。ほとんどの浪士は外出中で、大利鼎吉と主人の政右衛門しかいませんでした。政右衛門は逃亡に成功しましたが、大利鼎吉は奮闘の甲斐なく斬り伏せられてしまいます。多勢に無勢で押しかけていながら、正木は右腕に四寸、谷 三十郎は足に、谷 万太郎は胸元に手傷を負っています。これ以降、谷 三十郎は新選組幹部の信頼を失うこととなります

石碑には、大利鼎吉がたまたま前日に詠んだといわれる歌が刻まれています。

「ちりよりもかろき身なれど大君に ころばかりはけふ報ゆなり」

碑は昭和12年3月3日に建立されています。

この碑の題字は、ぜんざい屋事件で危うく難を逃れた浜田辰弥、後の正二位勲一等伯爵 田中光顕が記しました。



「田中光顕」と刻まれている



辞世の歌



谷 万太郎の写真

私がこの「大坂の史跡を訪ねて」の連載を始めたきっかけは、「海援隊大坂屯所(薩万)跡」をはじめとして「勝 海舟寓居である専稱寺跡」「徳川家茂終焉の地」「小松帯刀終焉の地及び墓所跡」などを調査し、会報で発表したい思い、連載を始めました。「海援隊大坂屯所(薩万)跡」はまだ、継続して調査・研究していきたいと思っております。
読者の皆様で何か情報があれば、ぜひご提供いただきたいと思っておりますのでよろしくお願ひします。
次回以降もご期待ください。